

## 青刈燕麦 (*Avena sativa* L.) の生産に関する試験

立野, 喜代太  
九州大学農学部

松尾, 恒喜  
九州大学農学部

<https://doi.org/10.15017/14116>

---

出版情報 : 九州大学農学部農場研究資料. 4, pp.6-7, 1977-06. University Farm, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

## 青刈燕麦 ( *Avena sativa* L ) の生産に関する試験

立野 喜代太 ・ 松尾 恒 喜

この試験は、飼料用青刈燕麦の生産向上を目的として、播種量および施肥量を変えた場合、生育にどのような影響を与えるかについて、生草ならびに乾物重の変化をみたものである。圃場は畑地（農場旧園区の一部）を使用し、1plot当り10m<sup>2</sup>、2回反復とした。平畦、条播栽培（条間50cm）で、昭和49年12月9日播種した。播種量は10a当り4kg、6kg、および8kgの3段階とし、元肥および追肥は高度化成48号（成分量N16%、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>16%、K<sub>2</sub>O16%）を用い、施肥量を標肥区（元：30kg、追：20kg）および多肥区（元：40kg、追：30kg）の2段階とした。調査は2回にわたって行ない、第1回は最高分けつ期（3月24日）、第2回は出穂始期（4月14日）に行なった。以下はその結果の概要である。なお、この試験は実験(Avena test)用の採種を主目的に栽培を続けてきたもので、種実の収穫は園芸学教室によつてなされた。

第1表 生草ならびに乾物生産 (g/m<sup>2</sup>) 試験の結果

施肥	播種 (kg/10a)	最高分けつ期 (3/24)		出穂始期 (4/14)		
		F	(D)	F	(D)	H
標肥区	4	516±226	(84.8±30.6)	1780±78	(213.2±88.8)	60.4±3.4
	6	847±174	(129.4±26.0)	2283±353	(222.0±45.0)	73.2±4.3
	8	802±111	(128.2±23.0)	2100±368	(271.1±43.9)	68.6±4.1
多肥区	4	800±81	(117.3±14.5)	2493±609	(334.2±81.9)	67.7±2.4
	6	1159±139	(161.2±22.3)	3707±291	(433.0±43.2)	78.4±3.8
	8	1147±329	(162.4±44.1)	3320±850	(377.0±89.4)	76.9±3.7

註) F: 生草重, D: 乾物重, H: 草丈 (cm)

第1表は、1plot当たり3カ所の sampling を行ない、反復による合計6ヶ所のm<sup>2</sup>当りの生草ならびに乾物重を測定した平均と標準偏差の値を示す。この表から、標肥区よりも多肥区の収量が高く、6kg/10a播種が他の播種区にくらべて高い傾向が認められる。

第2表は生草重の分散分析の結果を示す。3月24日に採草した分では、播種量間に有意差は認められない。しかし、施肥量間で差が認められる(5%水準で有意)。また、播種量と施肥量との交互作用によつて、生草収量に差があらわれるとは考えられない。一方、4月14日採草の分を見ると、播種量、施肥量の両処理間で差が認められる(5%水準で有意)。播種量と施肥量との交互作用は前回同様、認められない。播種における3処理間の差を検定した結果、6kg—4kg、8kg—4kg間に1%水準で有意な差が認められ、6kg播種した生草収量が最も多く、次いで8kg、4kgの順に少なくなっている。しかし、6kgと8kg播種との間の差は有意ではない。

第 2 表 生草重の分散分析表

( 3 / 2 4 )

要 因	ss	∅	ms	Fobs	Foos	Fool
播種量(S)	293731	2	146862	3.50	5.14	10.9
施肥量(M)	294847	1	294847	7.02*	5.99	13.7
S × M	1928	2	964	0.02	5.14	10.9
誤 差er	251867	6	41978			

( 4 / 1 4 )

播種量(S)	1529341	2	3058682	8.94*	5.14	10.9
施肥量(M)	3756483	1	3756483	10.98*	5.99	13.7
S × M	267351	2	534702	1.56	5.14	10.9
誤 差er	2053305	6	342218			